

前置詞 *over* の典型意味論的分析

竹 鼻 圭 子

0. 序

動詞小辞結合が英語という言語に大きな活力を与えていることは周知のことであり、これまでにも多くの研究がされてきた。しかし、その要素である小辞（例(1a)）が前置詞（例(1b)）と同一の語彙であるために持つと思われる意味機能の特性を明らかにしようとする試みは少なかったと思われる。

(1) a. He looked ⁽¹⁾*over* the client.

b. He looked *over* the fence.

また、動詞小辞結合そのものについての研究も、Fraser(1974)に代表されるように、literal な用法と idiomatic な用法とに統語的に二分しようとする試みが多く、小辞そのものの持つ意味特性に焦点があわされることが少なかったように思われる。本論では語彙意味論の方法論の主流をしめてきた成分分析や意味の場等の理論の限界を克服する理論と言われている典型意味論（prototype semantics）⁽²⁾の観点に立ち、Space Grammar の考え方も加味して、生産性の高い小辞の一つである *over* にしぼってその意味機能を考察してゆく。

1. 典型意味論

ここでは語の意味を成分分析理論や意味の場の理論ではなく、より自然構造や人間の知覚に近いと考えられる典型意味論の観点からとらえようというわけである。いわゆる典型的意味表示というのは、言語表現の意味をあるカテゴリーに属するための必要十分条件で示すのではなく、そのカテゴリーの典型を示し、その典型に他のものがどの程度近いかを分析することで示そうとするものであり、Fillmore(1982)によれば Climb 形、Long 形、Bird 形、Red 形、Bachelor 形、Decendent 形の六種類がありこの議論に最も関連のあるのは Long 形と Bird 形である。Long 形⁽³⁾は、あるカテゴリーが諸条件の離接の形で示されるが、その内の一つの条件が優位にある場合で、この最優位の条件を満たす場合が基本の用法であり、他の場合はその基本的用法からの派生的用法ということになる。形容詞 *long* は空間的長さを示すのが基本であり、時間の長さを示す場合は、派生的用法というわけである。また Bird 形は、あるカテゴリーが諸条件の集合で示されるが、そのカ

テゴリーの cue validity となる要素を集めた理想像がある場合である。bird の学術的定義は robin も penguin も ostrich も満足させるが、一般にはこの内では robin が最も鳥の理想像に近いとされている。たとえば同じ over という語が、本来の空間的意味からある種の動詞と結合することで Long 形的により抽象的な意味を持つようになる。そしてその動詞—over の結合自体も Long 形的によりイディオム性の高い意味を持つようになったり、動詞₁, 動詞₂, 動詞₃……といったいくつかの動詞の意味の関連性から、動詞₁—over を典型としたいいくつかの結合が Bird 形的に一つのカテゴリーをなすようになったりするのである。こういった点について 3 節, 4 節でくわしく観察してゆきたいと思う。

2. Space Grammar

1 節でふれたように、一般に over という語は基本的には空間的意味を持ち、そこから抽象的な意味が派生されると考えられているが、このことは Space Grammar によく体系づけられているようであるので、ここではその概要を述べておく。Space Grammar においては、辞書項目は意味表示と音表示との抽象的集合と考えられている。そしてこの意味表示は意味空間の認識的領域と考えられている。この認識的領域には基本的なものと抽象的なものとの二つがあるとされ、基本的認識領域をとるものには時間や具体的空間、知覚可能な領域や感情の領域などが含まれるとされている。一方の抽象的認識領域は基本的認識領域を基礎として作られると考えられている。基本的認識領域は、1 節で述べた典型と重なることが多いわけであるが、over の基本的認識領域は具体的空間と考えられ、Long 形の典型と一致する。また、一つの predicate は基本的意味から抽象的な意味までを含む functional assembly (FA) と呼ばれる抽象的意味領域を持つものとして定義される。この FA とは人間の現実世界についての連続的な知識の体系であり、言語の実体はこの知識の上に築かれ、それを表現するものと考えられる。つまり、各々の predicate はある FA の特定の一面として特徴づけられ、それが音表示されるわけである。そして、この predicate は object と relation との二つのタイプに分けられる。object は一定の領域と理解される指示対象を持つものとして定義され、他方の relation は二つ以上の object を指示対象として関連づける。たとえば, cup on table では cup や table は object であり, on は relation である。そして同じ object であっても、この場合, cup は table との関係においてその存在が位置づけられるわけであるから, cup は trajector, table は landmark と呼ばれる。

3. *over* の意味機能

3.1 前置詞 *over* の空間的意味

この節では *over* の基本的な意味と考えられる空間的意味について Bennett(1975) にもとづいて分析しておきたい。

Bennett は英語の前置詞の意味分析にあたって, extent (E), goal (G), locative (L), path(P), source(S)の5つの格をもおけている。そして *over* については(2)の6つの場合が主な意味として挙げられ, 各々の意味表示は(3)のようになる。

- (2) a. My hand is over the table.
 b. I removed the lamp from over the counter.
 c. The husband in the upper bunk rolled over against the wall. (SK)
 d. Liz took off her coat and leaned over and covered him with it. (SK)
 e. Then they were over the first hill. (SK)
 f. A car appeared from over the hill.
- (3) a. [L [superior of table] place]
 b. [S [L [superior of counter] place]]
 c. [P [L [superior of bunk] place]]
 d. [G [L [superior of him] place]]
 e. [L [P [L [superior of hill] place]] place]
 f. [S [L [P [L [superior of hill] place]] place]]

over の意味素成を定義するにはこういった意味表示の内どこまでが *over* によって表わされているのかを考える必要がある。*table* や *counter* や *hill* といった辞書項目で表現される机やカウンターや丘といった要素が *over* の意味に含まれないのは自明のことであり, これと同様, (b) や (f) の source という要素もまた *from* という辞書項目によって表現されると考えられるため *over* には含まれないと言える。ここで Bennett の分析について特筆すべき事は, path や goal という要素の表現が zero になる場合もあるとし, その意味は文全体の意味から脈生されるという点である。この点については反意語と考えられる *under* の意味分析との比較等による考察が加えられているが, このように考えることによって, *over* をただ単に locative superior of の写像と考えることができるのである。こういった考え方は(c) や (d) にあてはまるばかりでなく, 例(4)の文が二義を持つことから, (e) や (f) の場合にもあてはまると考えられる。

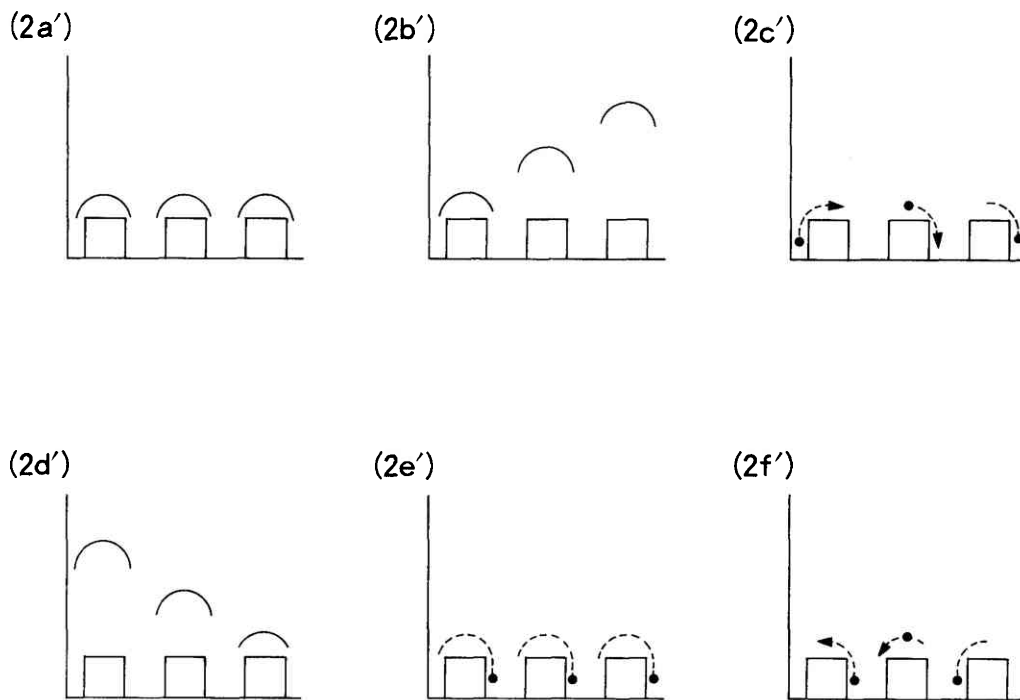
- (4) The helicopter is over the hill.

すなわち, ヘリコプターが丘の上空にある場合と, 丘を越えた向う側にある場合とが考えられるというのである。

また、(5)に見られるように一般に *over* が持つと考えられている何かをおおう意味も、*extent* 的表現の一つと考えられるとしている。

- (5) Jordon's fingers, powdered white over their tan, rested for a moment in mine. (GG)

こういった分析を Space Grammar 的に図解しておくことにする。たて軸を空間的位置、横軸を時間とし、object の内 *trajector* を黒点あるいは黒線とし、*landmark* を四角で図示すると、*over* の示す *relation* は次のようになると考えられる。



3.2 副詞的 *over* の基本的意味

3.1で見たように前置詞 *over* は *locative superior of* と意味分析されるわけだが、副詞的に用いられる場合でも基本となる空間の意味で用いられる場合にはこのままの意味が生きてくる。たとえば、

- (6) a. He fired at the man, but his shots all went over.
b. Trees hang over from either side of the river.
c. The milk has boiled over.
d. We went over to the island in a small boat.

(Hill(1968)による)

例(6)に挙げられた文の意味表示は(7)のようになると考えられる。

- (7) a. [his shots[go[P[L[superior of ϕ]place]]]]
b. [trees[hang[L[suprior of ϕ]place]]]

c. [the milk[boil[P[L[superior of ϕ]place]]]]

d. [we[go[P[L[superior of ϕ]place]]]]

このように *over* が副詞的に用いられる場合の意味表示は *locative superior of ϕ* となることが多いのが特色である。この ϕ は実際には表現されないが、文全体の意味から推測可能である。すなわち、(6a)では弾丸が素通りしてしまうのは文中の *the man* であると推測される。また(6b)では、木がおおいかぶさっているのは文中の *the river* であると推測される。そして(6c)ではミルクがふきこぼれるのは文中には明記されていないが、一般通念から *the edge of the container of the milk* であると推測される。同様に(6d)では文中に明記されていないが、舟で渡ってゆくのは *the sea, the lake, the river* 等の水面であることが推測されるわけである。

3.3 副詞的 *over* の抽象的意味

over が副詞的あるいは動詞小辞結合の要素として用いられる場合、3.2で観察した基本的意味を典型として抽象的な意味が *Long* 形的に派生されると考えられるわけであり、こういった意味で用いられる場合には非常にイディオム性が高くなる。

たとえば次例では財産がひき渡される様子が、上を越えていく動きとしてとらえられている。

(8) The old man deeded over the estate.

[The old man[deed[P[L[superior of ϕ]place]]the estate]]

また例(9)では最後まで読み切る様子が上を越えてゆく動きとしてとらえられている。そしてこういった用いられ方から(10)などでは視察する意味が生まれてくる。

(9) She read the letter over carefully.

[she[read[P[L[superior of the letter]place]]]]

(10) Colonel Weston pored over the hotel register.

[Colonel Weston[pore[P[L[superior of the hotel register]place]]]] (EUS)

また(9)で見た最後まである行為をする意味から、*over again* や *over and over* がくり返しの意味になる。

(11) Each of us said over and over that it was a ‘crazy idea.’ (GG)

一方、越える対象が具体的な物体から一定の時期に抽象されることがある。

(12) I shall hold this bill over until next month.

[I[hold[P[L[superior of ϕ]]]this bill]]

また、空間的に越えた位置にという意味から余剰の意味に抽象されることもある。

(13) There was no milk left over.

[There[be left[no milk[L[superior of ϕ]]]]

4. 動詞—*over* の連鎖の意味機能

4.1 Bird 形的典型

この節では *over* の一つの意味を中心にいくつかの動詞—*over* の結合が一つのカテゴリをなしており、それは Bird 形的な典型を持っていることを示したい。

前置詞 *over* は locative superior of と意味分析されたが、副詞的に用いられる場合、次の三つのタイプが Bird 形的典型を持つものとして考えられる。

- (14) i) deed(*over*), fork, give, hand, pass, turn,
- ii) board, brick, cement, glass, mortar, wall,
- iii) build, fix, get, go, hold, look, make, pick, read, sort, work.

この三つのタイプを3.1節で示したような Space Grammar の図によって示すとすれば、(14i)は(2c'), (14ii)は(2a') のようになると考えられる。すなわち、一つのタイプは一つの図によって全て示すことができ、この図に示された概念を中心に一つの動詞—*over* の連鎖を典型とした一つのタイプが存在するのだということがわかる。

(14i)では *give over* を典型とし、物が受け渡される様子が示される。この場合、*over* が有る場合と無い場合とでは次に示すような文法的ちがいがある。(Fraser(1974)による)

- (15) a. The old man deeded over the estate.
- b. *The old man deeded the estate.

つまり、*over* が有る場合には間接目的語は必要無いが、*over* が無い場合には間接目的語が必要となるのである。両方の文に *to the police* 等の間接目的語をつけ加えれば、両方とも文法的な文になる。これは、(2c') の図からもわかるように、*over* が有ることで、行為の goal が暗示されるためと考えられる。(14ii)では *cover over* を典型とし、次に示すように助格副詞を持つ文が本来の形であると考えられる。

- (16) a. They boarded over the hole.
- b. They cover over the hole with a board.

(14 iii)では *get over*, *go over*, *make over* 等が典型と考えられ、*over* は行為のくり返しや、全体を完全にという意味を示す。

4.2 Long 形的典型

ここでは同一の動詞—*over* の連鎖が Long 形的に派生された意味を持つことを観察してみたい。次の例文を観察されたい。(Hill(1968)による。)

- (16) a. They go over the sea to their island in small boats.
- b. He went over the whole story again.
- (17) a. The river is always shady here because trees hang over from either

side.

b. The threat of punishment hung over his head.

(18) a. The road runs over that hill.

b. Now let's run over that scene again and see whether we can do it without a mistake this time.

(19) a. When they reached the river, they tried to get over.

b. He hasn't got over the death of his wife yet.

厳密に言えば従来の品詞区分では、(16a)(16b) (17a) (17b) (18a)は前置詞であり、(18b) (19a) (19b)は副詞的ということになるが、ここで問題にしたいのは、(a)と(b)の意味関係である。つまり、(a)の例文は2節で述べた **Space Grammar** の言う基本的認識領域をとるものであり、(b)の例文はそれに対して抽象的認識領域をとるものと考えられる。そしてこのことはとりもなおさず(a)の例文にある *over* の空間的意味を典型として、(b)の抽象的意味が派生されることを示している。このように、動詞—*over* の連鎖が Long 形的に派生された意味を持つことが観察されたわけである。

嶋田(1985)によれば、同じ動詞—前置詞の連鎖であっても、抽象度の高い意味を持つ場合(たとえば *look after* (世話をする), *get at* (なじる)等)は動詞副詞、動詞小辞結合に多く観察される統語上の特性を持つことが示されている。たとえば副詞をはさむことや前置詞を節頭に移動することが許されない。

(20) a. *Olive gets frequently at her husband.

b. *The aged father after whom he was looking...

この意味において、従来の品詞区分だけで、英語のたとえば動詞—*over* の連鎖の機能を論ずるのは無理であり、ここに示した典型意味論的分析の必要性がもっと認識されるべきであろう。

5. 結び

本論では、典型意味論や、**Space Grammar** の考え方をとり入れることにより、英語の前置詞の意味機能がより有機的にとらえられたと思われる。つまり、副詞、前置詞というような区分を越えて、統一的な意味機能が有ることが結論づけられるのである。ここに見られた典型意味論や **Space Grammar** が示す意味の広がりの方角性は **universal** なものであると考えられるので、たとえばここで観察された英語前置詞の持つ認識領域が、日本語などではどのように辞書化されるのか、そしてそこからどのような抽象的意味が派生されるのかといったことについて比較検討してみるのも興味ある課題である。

注

- (1) ここでいう動詞小辞結合 (verb-particle combination) とは動詞と前置詞とが一つの動詞のような働きをする場合のことであり、他に句動詞、複合動詞、動詞副詞結合、動詞前置詞句等と呼ばれているものである。
- (2) prototype semantics については原型意味論と訳されることも多いようであるが、本稿では prototype という語の持つあるカテゴリーを代表するという意味をより良く表わすと考えられる典型意味論という訳語を用いた。
- (3) 他の典型的意味表示についての説明を補足しておく、
Climb 形 相補的な条件の離接によってあるカテゴリーが示される場合。

Climb には Clambering と Ascending の二つの条件が必要である。A monkey climbing up a flagpole. ではこの二つの条件がどちらも満たされているが、A monkey climbing down a flagpole. では Clambering の意味しかない。A snail climbing the wall. とは言えるが、この場合 Ascending の意味だけであり、へびが壁を降りて来る場合には Ascending の意味も Clambering の意味もないため climbing とは言えない。このように条件の一方が欠けることはできても、両方とも欠けることはできない。

Red 形 中心 (target) のまわりの一定の領域として各々のカテゴリーが定義され、それらのカテゴリーが一つの集合をなしている場合。

色の名がよい例であり、同じ red で示される色でもいろいろな色がある。

Bachelor 形 あるカテゴリーが諸条件の集合で示されるが、典型的な背景があってはじめて用いられる場合。

Bachelor は未婚の成人男性として定義されるが、結婚や結婚可能な年令についての何らかの前提のある人間社会で用いられる名詞である。長く同棲している男性や、ジャングルで成長した男性や、パウロ二世を bachelor とはふつう言わないだろう。このように典型意味論の観点からすれば、上記の例の男性たちを bachelor と言うべきか否かというようなことが重要な問題になるようなことはなくなってくるのである。

Decendent 形 あるカテゴリーが諸条件の集合で示されるが、その典型的用法は、話者がそのカテゴリーに特殊な名前が与えられるような行為に従事している時であるような場合。

たとえば decendent という語は遺産相続などに関係する法的な場面で用いられる。

- (4) 前置詞、副詞、副詞的小辞についてのそれぞれの統語的特性による品詞区分については、Fraser (1974)、嶋田(1985)等にくわしい。

引用文出典

EUS=Agatha Christie, *Evil Under the Sun*, A Kangaroo Book.

GG=F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby*, Penguin Books.

SK=Ernest Hemingway, *The Snows of Kilimanjaro*, Penguin Books.

参考文献

Bennett, D. C.(1975) *Spatial and Temporal Uses of English Prepositions*, Longman.

Bolinger, D.(1971) *The Phrasal Verb in English*, Harvard University Press.

Fillmore, C. J.(1982) "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis," *Speech, Place and Action*, R. J. Jarvellan and W. Klein(eds.), John Wiley & Sons.

Fraser, B.(1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Taishukan.

Hill, L. A.(1968) *Prepositions and Adverbial Particles*, Oxford University Press.

小西友七(1970)「英文法研究」大修館。

前置詞 over の典型意味論的分析

Lindner, S. J. (1983) *Lexico-Semantic Analysis of Verb Particle Constructions with 'Out' & 'Up'*, IULC.

嶋田裕司(1985)「句動詞」新英文法選書第5巻, 大修館。

竹鼻圭子(1984)「英語前置詞の典型意味論的分析」大手前女子大学論集第18号。